

## <説教>

ろばの子にのってユダヤの都エルサレムにお入りになる主イエスに向かって、イエスについて行った群衆は「ホサナ、ダビデの子に。」と熱狂的に叫びました。

しかしエルサレムの人々はイエスのことを「こいつはだれだ」と言って、大いなる動揺、不安、疑惑を持って迎えたのでした。

それで、都の人々のこの態度に群衆もまた萎縮（いしゆく）してしまい、「この人はガリラヤのナザレから出た預言者イエスだ」と言うことになってしまったようです。

もしかしたらエルサレムの多くの人々は「こいつはあの田舎の、『異邦人のガリラヤ』の、何も良いものが出るはずもないナザレから出た一人の預言者イエスにすぎない」と言っていたのかもしれませんが。

しかしたとえそうだとしても、預言者とは神のみことば（言）を聞き（預かり）それを忠実に人々に語る者なのですから、その意味でイエスは預言者の中の預言者であり、真の、言うなれば唯一の完全な預言者なのです。

昔のイスラエルの預言者たちは神の命令とあらば、人々から何を言われようが何と思われようが、神に忠実に語り行動したのでした。

そしてそれは時に人々の目には“極端”な“常軌を逸した”激しいものでした。

本日の聖書箇所ではイエスもそのようになさっておられます。

「わたしを預言者だと言うなら言うがよい。わたしは昔の預言者イザヤやエレミヤにも増して、彼らに優る真の預言者としていっそう神に忠実に語り、神に忠実に行動する。彼らのようにわたしもあなたがたに対して権威をもって神の審判を宣告する。」

そして「わたしが、あの昔の預言者たちが預言し待ち望んでいたキリストなのだ。」

そうイエスははっきりと宣言なさったのです。

**21:12** それから、イエスは宮に入って、その中で売り買いしている者たちをみな追い出し、両替人の台や、鳩を売る者たちの腰掛けを倒された。

**21:13** そして彼らに言われた。「『わたしの家は祈りの家と呼ばれる』と書いてある。それなのに、おまえたちはそれを『強盗の巣』にしている。」

「宮」とはエルサレムにあった“ヘロデの神殿”と呼ばれた（第三）神殿のことです。

（ソロモン王が建てた“ソロモンの神殿”が第一神殿、バビロン捕囚後に建てられた“ゼルバベルの神殿”が第二神殿です。）

ヘロデの神殿には至聖所、聖所、祭壇の周りに「祭司の庭」「イスラエル（男子）の庭」、その一段低い外側に「婦人の庭」、更にそれらの周りに更に低い「異邦人の庭」がありました。

「売り買い」はこの「異邦人の庭」で行われていました。

「売り買い」の一つが「両替」でした。

ユダヤ以外の諸国に散っていた人々がエルサレムの神殿に献金をするためには、普段自分たちが使っている貨幣（ユダヤ貨幣ではない）をユダヤ貨幣に替える必要がありました。

それで宮には「両替人」がいたのです。

もちろん彼らは手数料（1/10～1/6ほどだったようです）を取っていて、それは宮の費

用に使われたりもしましたが同時に「両替人」の利益にもなったわけです。

「売り買い」のもう一つは「鳩を売る」ことに代表されるどころの、いけにえの動物を売り買いすることでした。

エルサレムの神殿ではいけにえの動物を献げる必要がありましたが、その動物をわざわざ家から連れて旅をして来るのは大変でした。

またそれがちゃんと規定に合っているか（傷のないものかどうか等）の検査も大変でしたし、わざわざ連れて来た動物がいけにえとして不合格だったらそれも大変です。

それで、エルサレムの神殿に礼拝に来る人々はその場で検定合格済みの動物を買ったのでした。

その限りでは、「鳩を売る」ような売店も必要ではありましたが。

しかし、売店は祭司アンナス一族が所有し“アンナスの売店”と呼ばれていたということで、やはり彼らが利益を得る場となっていたのです。

「売り買い」は、いかにも見るからに“あこぎ”な様子で行われていたわけではありませんでした。

「宮」を管轄する祭司の許可も得て、合法的に行われてはいました。

エルサレム神殿での神礼拝のためにはどうしても必要なこととされていたわけです。

しかしイエスは確かにそこに信仰のため、神礼拝のためといった美名を纏（まと）ったむさぼりを見てとられたことは間違いありません。

外見は神に向かってるように見えても心が神に全然向いていませんでした。

彼らの心が向かっていたのは金であり自分たちの利益だったのは間違いありません。

それは結局は、既にイエスが指摘しておられたところの、「人に見せるための善行」であり、「人にほめてもらおうとする」行いであり、「人々に見えるように」する祈りと同じ誤りでした。

『わたしの家は祈りの家と呼ばれる』と書いてある。それなのに、おまえたちはそれを『強盗の巣』にしている。」とイエスは言われました。

「わたしの家は祈りの家と呼ばれる」とはイザヤ書 56 : 7 の中からの引用です。

「わたしの聖なる山に来させて、わたしの祈りの家で彼らを楽しませる。彼らの全焼のささげ物やいけにえは、わたしの祭壇の上で受け入れられる。なぜならわたしの家は、あらゆる民の祈りの家と呼ばれるからだ。」（イザヤ 56:7）

ささげ物も祈りも神に向けてささげるべきものですから、そういう神奉仕のための「売り買い」ならば「神のことを考え」てなされるべきでした。

しかし神の家である神殿で行われていた「売り買い」はもっぱら「人のことを考えて」、人の利益・むさぼりに利用されていたのでした。

それは「強盗」のわざと言うほかありませんでした。

「強盗の巣」とはエレミヤ書 7:11 にある言葉です。

「わたしの名がつけられているこの家は、あなたがたの目に強盗の巣と見えたのか。見よ、このわたしもそう見ていた—主のことば—。」（エレミヤ 7:11）

紀元前 600 年ごろ、神のさばきによる南ユダ王国滅亡、エルサレム神殿（ソロモンの神殿）壊滅が近い時代のエレミヤの預言でした。

引用された 11 節だけでなく、その前後も見ればわかりますが、エレミヤは既に起こっ

た北イスラエル王国の滅亡にもふれ、南ユダ王国にも同じ神のさばきが必ず下る、それはもはや避けられないと宣告したのです。

預言者にとって不可欠なはずの「民のためのとりなし」さえもここでは神が禁じるほどの、もはや赦され難いイスラエルの民の神への不信仰と反逆の罪深さでした。

「自分たちは北イスラエルとは違ってダビデの直系の部族だ。都エルサレムには神殿もある。神殿で礼拝していさえすればそれで自分たちイスラエルの民は安心安全だ。」と彼らは考えていました。

彼らには神への、また神の前での信頼（信仰）、悔い改め、従順、感謝ということがありませんでした。

神殿は彼らの悪事（盗みだけでなく、殺人、姦淫、偽証、偶像礼拝など）が簡単に気軽に赦されるところの、真の悔い改めなき“免罪”の場でしかありませんでした。

そうやって彼は、いうならば神の恵みを盗み取り、また神の榮譽を奪い取っていただいたのです。

神殿は、そんな神への不信仰者、反逆者たちが巣くう場所「**強盗の巣**」となっていたのです。

また、盗人が自分たちの隠れ家である「**強盗の巣**」に戻ってももちろん悪事を悔い改めることはありません。

そこで休み、平安を得て、再び盗みをするために外に出て行くという意味でも神殿が「**強盗の巣**」になっていたのです。

そんな信仰のかけらもない、死んだユダヤ人の宗教とその巣窟であるエルサレム神殿に対する神の審判をイエスはここで宣告されたのです。

イエスのご自身が、それを権威を持つてすることができるお方、ユダヤ人の王、神殿の真の主、礼拝の主であることをここで明らかになさったのです。

そしてご自身が、イザヤやエレミヤといった昔の預言者たちが預言し、待ち望んだ約束のメシヤ、キリストであることを明らかになさいました。

「この人はだれなのか。」というエルサレムの人々の疑義にはっきりとお答えになったのです。

そしていけにえの動物の商売人を神殿から追い出したことで、もはや動物を何度もいけにえとしてささげる礼拝は終わりとなることをも明らかになさいました。

なぜならイエスご自身がご自分をただ一度限りの完全ないけにえとしてすぐに十字架で神におささげになるからでした。

更には三日目によみがえられ、ご自身が真の神殿（ヨハネ 2:21）であることも明らかになさることになります。

このキリスト・イエスのおかげで、私たちは「御霊と真理によって」（ヨハネ 4:23）神を礼拝することが許されており、そういう者として召されているのです。

そして教会が、また私たちが「神から受けた聖霊の宮」（I コリント 6:19）として「**強盗の巣**」改め「**祈りの家**」とされるのも、イエスの権威あるみことばとみわざによるほかないのです。